

## カメルーン共和国の小学校での健康教育実践についての報告と今後の展望

## Report of Health Education Lesson in Republic of Cameroon

沖津麻依, 小澤大成

Mai OKITSU, Hiroaki OZAWA

鳴門教育大学

Naruto University of Education

## 1. はじめに

今回のカメルーン訪問の目的は小学校での保健教育の実施であった。保健教育の実施からや学校環境、生活環境などを目にすることにより、同国で顕在化している衛生・健康問題だけではなく潜在的な問題を確認することが出来た。また同国だけではなく途上国全般的に手洗い器具・施設、保健教育的指導上の知識の欠如、専門的知識の欠如、ごみ問題、トイレ問題など細かく分類すると数多くの衛生的な問題が山積している。これらの問題は同国だけでは解決できず、他国の支援が必要であるが、支援はあくまで支援であり、実践し継続していくのはその土地、その国で暮らす彼ら自身であるという考えが私の中で確立したように思われる。同国で日常的に用いられている用具を用いて、誰が、どのような目的で健康教育を推進していくか、などについての情報収集を行い、実践するための困難が生じた際もどのように解決するかを支援側ではなく、彼らが考えられるように支援を行う必要があると考えた。

2. カメルーン共和国の紹介<sup>(1, 2)</sup>

カメルーン共和国はアフリカ中央部に位置し、周辺をナイジェリア、チャド、中央アフリカ、コンゴ共和国、赤道ギニア、ガボンに囲まれている。面積は475,440平方キロメートル（日本の約1.26倍）、人口は2,344万人で、首都はヤウンデ。国内ではキリスト教、イスラム教、地元信仰などが主である。ヤウンデ市内には官公庁及び各国大使館、大統領府などが存在し政治都市である。また沿岸付近にはドゥアラと呼ばれる国内最大の経済都市が存在している。国内には240もの民族が存在しており、例としてはドゥアラ族、バミレケ族、バムン族、フルベ族などである。また言語も同様に多数存在しているが、共通言語はフランス語と英語

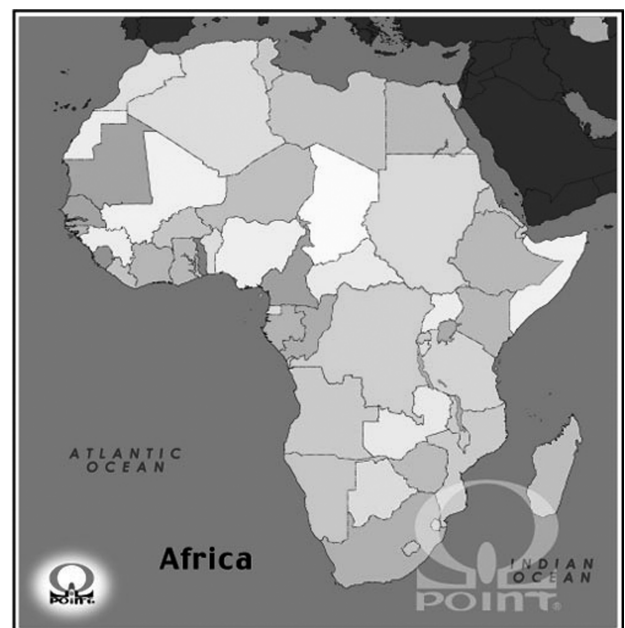
とされている。しかし実際にはフランス語話者は人口の7割、英語話者は人口の3割程度であるといわれている。近年ではバイリンガルの養成に力を入れており、フランス語圏でも授業を英語で行う学校も存在している。また識字率は男性（15-24歳, 2008-2012）85.4%, 女性（15-24歳, 2008-2012）76.4%<sup>(3)</sup>である。

国内気候は多彩で、北部は乾燥地帯、中央部は山脈、南部は熱帯雨林である。国内産業は主に農業（カカオ、綿花）、鉱工業（石油、アルミニウム）で、国内総生産は242億米ドル（2016年、世界銀行）である。

近年では同国極北部にボコ・ハラムが流入しており、テロが発生していることや、周辺国でも同様にイスラム過激派の侵入及びテロ行為の横行によって、治安の悪化が懸念されている。（外務省渡航危険情報で極北地域はレベル4：退避勧告が発令されている。）

（地図参考：OMEG point

<http://www.aquanotes.com/africa/index.html>）



(地図参考：日本国外務省 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/cameroon/index.html>)



### 3. カメルーンの教育制度<sup>4</sup>

カメルーンでは1884年からドイツ植民地、第一次世界大戦後はイギリス及びフランスに分割統治を受けた経緯より南西州2州は英語圏、それ以外の8州はフランス語圏と分かれており、また前述のドイツ当地の影響からドイツ語話者も少数ながら存在している。また英語圏、フランス語圏で教育システムが異なっている。近年ではバイリンガル政策を推し進められているため、英語、フランス語、両言語圏でバイリンガル教育が行われていることも多い。

カメルーンでは初等教育の6年間(6-12歳)までが義務教育で、授業料は無料である。「最終学年の終了時に初等教育修了認定試験があり、合格すれば初等教育修了証が与えられる。修了資格は仏語制度ではCEP (Certificat d' Etudes Primaires)、英語制度ではFSLC (First School Leaving Certificate) となり、これによって中等課程への受験資格を得る。」<sup>6</sup>

中等教育は中等普通教育校と、中等技術教育校の二つに分けられており、中等技術教育校は商業科、工業科の教育機関である。また中等普通教育は第一課程(中学校：仏語4年、英語5年)と第二課程(高等学校：仏語3年、英語2年)に分けられており、第一課程修了時の試験に合格すると中等第一課程修了証が与えられ、普通科高校または技術高校へ進学することが出来る。第二課程は理系文系などのいくつかのコースに分かれ、修了後試験により大学入学資格(仏語システムではバカロレア、英語システムでは第二課程修了資格)を取得して、高等教育過程へ進む。

高等教育機関として国立6大学の他、私立2大学の他、効率私立の専門高等教育機関が設立されている。大学は学士号3年、修士号1年、博士号3年である。

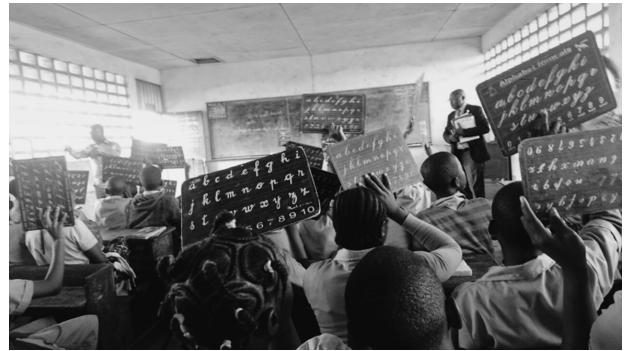


図1. カメルーン共和国授業風景



図2. 教室設備

### 4. 就学状況<sup>6</sup>

2008-2012		男性	女性
就学前教育		29.6%	30.4%
小学校	総就学率	127.8%	110.9%
	純就学率	99.6%	87.4%
	純出席率	87.3%	82.3%
	最終学年到達率	57.1%	86.8%
中学校	純就学率	44.2%	38.7%
	純出席率	52.9%	48.7%

### 5. 同国での日程

- ① 10/14 日本国出発
- ② 10/15 カメルーン共和国着
- ③ 10/16 Lesson study at Kondengui
- ④ 10/17 Lesson study at Nkomo
- ⑤ 10/18 Lesson study at Essos
- ⑥ 10/19 Lesson study at Nkolbisson
- ⑦ 10/20 Lesson study at MINESEC
- ⑧ 10/23 Lesson study at MINESEC
- ⑨ 10/24 Meeting at MINEDUB, カメルーン共和国発

- ⑩ 10/25 フランス共和国着
- ⑪ 10/26 日本国着

## 6. 同国で行った授業

同国では小学校にて①正しい手洗いの方法②食品に含まれている砂糖量の2つの健康教育授業を施行した。

### ① 正しい手洗い方法

本授業の目的は、手指の衛生状態を改善することによって手指から伝播する感染症の予防技術を取得し、実践することであった。まずパワーポイントにて最も多い感染源が汚染された手指であることを示した。その後、白い絵の具を子どもたちの手に塗布し、まず普段通りの方法で手を洗ってもらい洗い残している部位を明確にした。その後、正しい手洗いの方法を説明しながら代表者に実際に手を洗ってもらい、授業を終了した。

### ② 食品に含まれている砂糖量

本授業は7/31-8/6にかけてシンガポールにて見学した授業を参考に作成した。(シンガポール共和国小学校の現状視察～保健教育の視点から～6. シンガポール共和国小学校の現状からの考察～保健教育の視点から～(2) Temasek Primary School 生活科参照) 実施内容は、スプライト 1000ml, ドーナツ(日本のサターアンダギーのようなもの), Tartina(チョコレートスプレッド)を準備し、この食品に含有されている砂糖の量を計量し、ラップに包んで持参し、生徒たちにこれらの食品には多くの砂糖が含まれていることを示した。また授業終了後に健康を保つためには日常的に体重を計るということも有効であることを伝達し、10人ほどの児童の体重を実際に測定して、授業を終了した。

授業の目的は普段の食生活が健康に影響を与えることを学び、健康への意識を高めることであった。同国では感染症による死亡者数が多いが、生活習慣病関連死亡者も多いため、同授業を行った。対象学年としては高学年と想定していたが、同国の都合により小学校1年生へ実施した。

## 7. 授業実施の振り返り

### ① 正しい手洗い方法

本授業の目的は前述したように手洗いによって「手指の衛生状態を改善することによって手指から伝播する感染症の予防技術を取得し、実践すること」であったため、汚染された手指から生じる疾患名などには深く触れず、一般的に起こりうる症状に焦点を当てた授

業資料を作成した。児童の反応はこのような授業は初めてであったので、興味を持って授業に臨んでいたように感じる。しかし、私自身が児童に問いかけを投げても反応はあまり得られず、同国初等教育省 Mdm. Helen Ule Ngo(以下 Mdm. Helen)の協力により授業がようやく成り立っていた状況であった。このような結果となった理由としては私自身が児童に対して授業をするという経験がなく、また英語での授業であったため細かいニュアンスを伝えきれなかったこと、また児童自身も英語に不慣れであったことが挙げられる。私自身の思い描いた授業では投げかけた質問に児童が手を挙げて、答えていくことを前提としてしまっていたため、思わぬ状況に面食らってしまったこともあり、授業の手ごたえとしてはあまり良くなかったように感じられた。改善点としては児童が参加しやすいように、選択肢を提示し、「どの答えが正解だと思うか手を挙げてもらう」というような授業進行も想定しておくことである。また今回の授業では教員も参加していたため、教員への問いかけとするのもよかったのではないかと考える。授業内容については手指が一番の感染源であり、どのようなタイミングで手を洗うべきかや、汚れを残しやすい部位(爪、親指、指の間など)についても口頭で伝達したが、後々に見直せるように資料へ掲載するべきであったように考えられる。

今回の授業で児童や教員の手洗いにに対する意識を改変することは困難であるが、手洗いを行う必要があると少しでも認識してもらうことが出来たのではないかと思われる。日常的にどのようなタイミングで手洗いをしているか質問したところ、遊んだ後や、トイレの後、食事の後という回答であったことから考慮すると目視で手指が汚れたと確認できる際に手を洗っているのではないかと考えられるため、目視で手が汚れていなくても手指は常に汚染されており、食事前や料理前に手を洗うことで食品の汚染や汚染の曝露を予防することが出来、結果的に感染症の予防になるという健康維持技術及び概念の獲得を図っていく必要がある。目視で手指が汚染されていないにも関わらず、手を洗う必要があるということを説明する必要があるが、ウイルスや真菌などについても述べる必要があるため、対象学年の選定や、児童を取り巻く教員へも手洗いの意義を理解してもらい日常的に小学校で取り入れる必要があるため、単発的な授業だけでは周知が出来ないことが問題である。

### ② 食品に含まれている砂糖の量

この授業を作成・実施した経緯としては同国にて紅茶には必ず砂糖を入れることや、町中に落ちているペットボトルの中にジュースの容器も多数あったこと、



お菓子が安価に入手できること、学校でも子供たちがたびたびお菓子を口にしている場面を目の当たりにしたため、前述した Mdm. Helen の要請もあったことからである。また WHO の統計<sup>7</sup>によると同国での糖尿病死者数は 490,000 人（日本は 172,000 人）となっており、疾患別死亡割合<sup>8</sup>では 2% を占めている。（心疾患 11%, 事故 8%, 悪性新生物 3%, 呼吸器疾患 2% など）。しかし、WHO の報告<sup>8</sup>によると糖尿病に対する国家的な政策はないとのことである。

この授業を行う中でこの授業を受けてどのように生活を改善するかという問いかけを發した際に、私の意図したかったことはこれら砂糖が多く使用されている食品ではなく、水やナッツなど砂糖が使用されていないものを選ぶということであったが、事前に打ち合わせが出来ていなかったこともあり、前述の授業を支援して下さった Mdm Helen は提示された 3 つの食品の中で砂糖が少ないものを選ぶようにというような指導を行っていた。また含有されている砂糖の量を実際に示したが、子どもたちは好きなものを食べたいという気持ちが大きい様子で、授業が十分に伝わっていなかった。糖尿病が生活習慣から生じること、悪化することで日常生活が脅かされるだけではなく、死亡するリスクもあることなどを明確に提示する必要があったと思われる。そして支援者である Mdm Helen と事前に目的や授業のまとめをどのようにするかについて打ち合わせをすることで、より私の意図する授業展開となったのではないかと考えられる。

## 8. まとめ

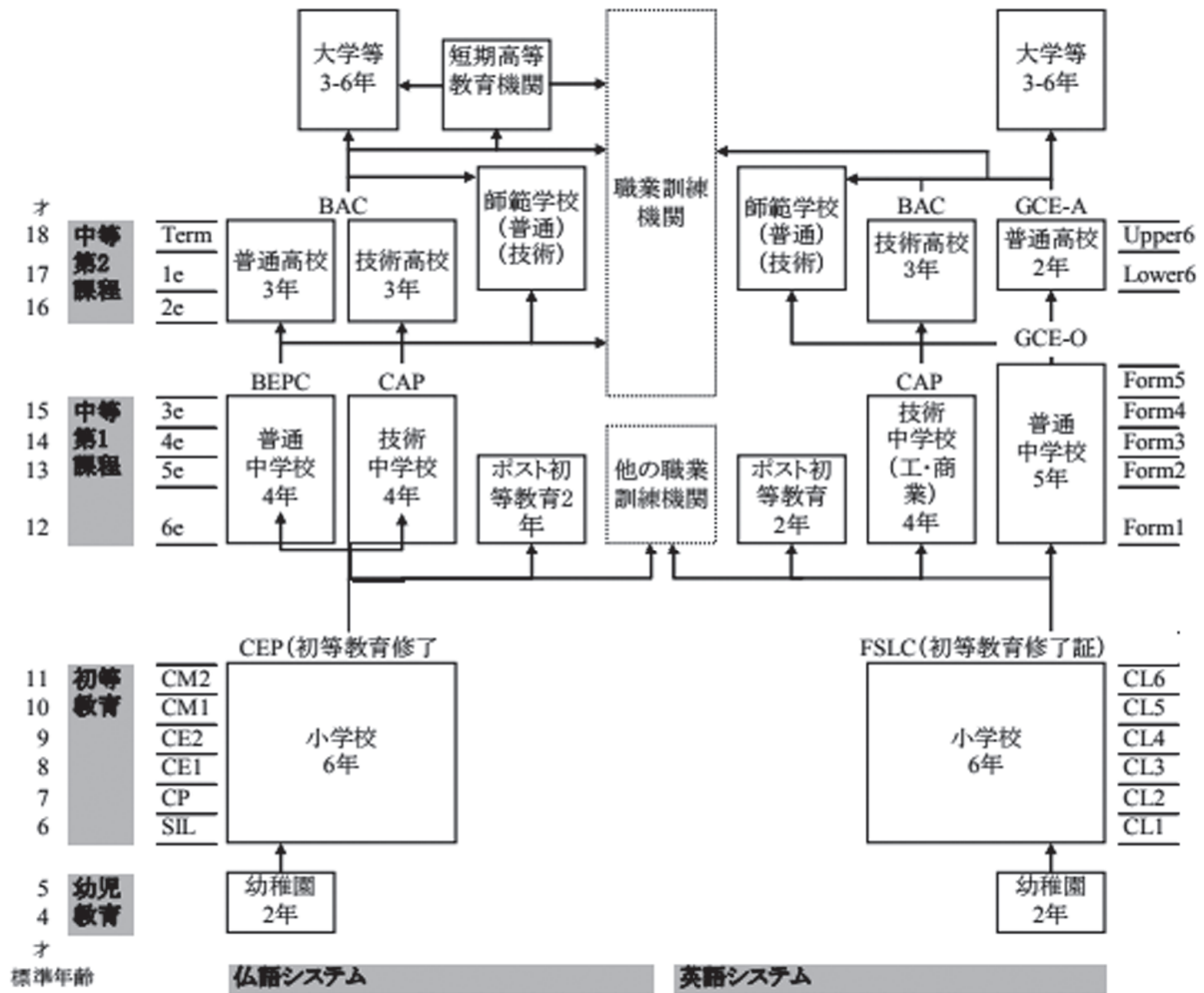
同国での授業は様々な困難があった。また事前の情報も乏しく、どのような環境で授業を行うことになるのか未知であることが多かった。しかし、実際に同国を訪れ、授業をしたことで得られた情報があり、新たな疑問を發見することが出来た。これは同国の理科の教科書に健康に関する記述が多く、手洗いの方法につ

いても記載されているにも関わらず、同国では実際されていらない。このことから実施を阻害する因子とは何かと考えた際に、そもそも衛生観念はどのように形成されていき、教科書上の知識と日常清潔行動が関連していくのかを考える必要があると考えた。今後も同国の衛生観念や、疾患予防概念などについて研究を継続していく予定である。

## 9. 引用文献

1. 日本国外務省, カメルーン基礎データ, <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/cameroon/data.html> 2 November 2017 access
2. 在日カメルーン大使館, カメルーンを知る, <http://cameroon-embassy-jp.org/ja/discover-cameroon/> 2 November 2017 access
3. UNICEF, Statistics Education Cameroon, [https://www.unicef.org/infobycountry/cameroon\\_statistics.html#117](https://www.unicef.org/infobycountry/cameroon_statistics.html#117) 19 November 2017
4. 日本国外務省, 世界の学校を見てみよう, [http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/camer\\_1.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/camer_1.html) 2 November 2017 access
5. 独立行政法人国際協力機構 (JICA), 株式会社マツダコンサツタンツ, 株式会社エーエーユー, カメルーン国第五次小学校建設計画協力準備調査報告書, P1
6. 独立行政法人国際協力機構 (JICA), 株式会社マツダコンサツタンツ, 株式会社エーエーユー, カメルーン国第五次小学校建設計画協力準備調査報告書, P2
7. World Health Organization, Measurement and Health Information, Mortality and Burden of disease estimates for WHO member states in 2004
8. World Health Organization, Diabetes country profiles 2016, [http://www.who.int/diabetes/country-profiles/cmr\\_en.pdf?ua=1](http://www.who.int/diabetes/country-profiles/cmr_en.pdf?ua=1)

10. カメルーン共和国教育システム図<sup>5)</sup>



学年	仏語システム	英語システム
1	言語習得課程 SIL(Section d'Initiation au Langage)	CL-1 (Class-1)
2	準備課程 CP (Cour Préparatoire) -O/S(Ordinaire/Spéciale)	CL-2 (Class-2)
3	基礎課程 1 CE1(Cour Élémentaire-1)	CL-3 (Class-3)
4	基礎課程 2 CE2(Cour Élémentaire-2)	CL-4 (Class-4)
5	中等課程 1 CM1(Cour Moyen-1)	CL-5 (Class-5)
6	中等課程 2 CM2(Cour Moyen-2)	CL-6 (Class-6)